

ピリピ書4章10-23節 「惜しみない捧げ物」

1A ピリピからの贈り物 10-20

1B 境遇に満足する道 10-13

2B 困難の分け合い 14-16

3B 霊的果実 17-20

2A 聖徒への挨拶 21-23

本文

ピリピ人への手紙の学びは、今日で最後になります。4章10節からですが、ここで、パウロがこの手紙を書いたきっかけになった出来事について触れます。それは、彼が今、ローマの牢獄にいる時に、ピリピの人々が金銭的な贈り物をしたことです。彼が手紙の冒頭で挨拶をした時に、「あなたがたはみな、私が投獄されているときも、福音を弁明し立証しているときも、私とともに恵みにあずかった人々であり、私は、そのようなあなたがたを、心に覚えているからです。(1:7)」と書いていました。この「恵みにあずかる」というのは、具体的には福音の働きや働き人のために金銭的支援を送ることでした。

ピリピ人への手紙には、「主にあって喜ぶ」という話題が貫かれています。キリスト者の特徴とも言える「喜び」ですが、それは私たちが所有している物、金銭が主にある喜びと深く関わっているということを今日は学びます。経済的なこと、日々の生活に深く関わります。私たちの人生を決めてしまいます。だからこそ、主との関係の中でとても重要なものなのです。イエス様が、このことを教えられました。「マタイ6:20-21 自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。あなたの宝のあるところに、あなたの心もあるからです。」

ある教会で牧師さんが私に話してくれたことを分かち合います。ちょうど、私とその教会にいた時に、一人の中国人の人がいました。少数民族の人ですが、その人々は日本に大勢の人が出稼ぎに来ています。牧師に相談に来たようです。そして、その教会には同じ民族の中国の家族がいました。牧師さんが後で私に分かち合ってくださいました。相談に来た人は、教会にはほとんど通っていません。お金がないという相談だったそうです。けれども、受け取っている旦那さんの給料は、教会に根付いているもう一つの家族よりもずっとあるそうなのです。彼らは忠実に、献金をする生活をしています。一方でもっとお金のある人が満足できないで悩んでいる相談を受け、もう一方はそれほどお金がないのに、満足して主に仕えている姿を見るのです。この違いは、もちろん「どこから力を得ているのか、何をもって満足しているのか。」にかかっています。

ピリピの人たちがパウロに献金をした背景は、コリント第二8章1-4節で見ることができます。「さて、兄弟たち。私たちは、マケドニヤの諸教会に与えられた神の恵みを、あなたがたに知らせようと

思います。苦しみゆえの激しい試練の中にあっても、彼らの満ちあふれる喜びは、その極度の貧しさにもかかわらず、あふれ出て、その惜しみなく施す富となったのです。私はあかしします。彼らは自ら進んで、力に応じ、いや力以上にささげ、聖徒たちをささえる交わりの恵みにあずかりたいと、熱心に私たちに願ったのです。」マケドニヤの諸教会とありますが、ピリピはマケドニヤの中にあります。パウロがここで話しているのは、彼らは迫害を受け、極度に貧しくなっていたのにも関わらず捧げたという事実です。金銭に有り余る中から捧げたのではなく、犠牲を払っていました。

そして大事なのは、「交わりの恵みにあずかった」と書いてあることです。私たちは交わりというと、誰からか何かを受け取る、もらえると考えてしまいます。けれども、誰かの福音の働きのために捧げるというところに、神の恵みの働きの中に交わるということが生まれ、霊的な益を得るということなのです。

1A ピリピからの贈り物 10-20

1B 境遇に満足する道 10-13

10 私のことを心配してくれるあなたがたの心が、今ついによみがえって来たことを、私は主にあつて非常に喜んでいます。あなたがたは心にかけてはいたのですが、機会がなかったのです。

この文を読むと、パウロにあるピリピの教会の人々に対する牧会の心を見ることができます。彼は10節から20節までの箇所、彼らが贈り物をしたことについて、それを喜んでるのは、物欲しさのためではないということを繰り返して言っています。これは真実なことばです。彼にとっての関心事は、彼らが主にあつて成長することです。主の恵みによって成長することです。そして成長するという中に、神が御子を惜しみなく私たちにお捧げになったその犠牲の愛が、彼らにも宿っていて、彼らも惜しみなく捧げるように導かれていることでもあります。神の愛に留まっているならば、その人が人々を愛さざるを得なくなります。そして福音を信じているならば、福音のために労している働き手を支えたいと願うようになります。その人に対するお礼という気持ちもなくはないですが、それ以上に、主に対する感謝の思いを福音の働きへの支援の中で表したいと願うのです。

金銭に関わることは、キリスト教会の中で微妙な話題です。これは初代教会も同じであり、パウロはコリントにある教会に対して、彼らが比較的裕福であったのに、パウロに対して厳しい目で見ました。また、パウロの働きを支えるところか、パウロの奉仕の務めに疑いをかけていた者たちも一部にいました。そうした非難から免れるためにも、彼は自分の手で天幕作りをして生活の糧を得ていました。しかし、本来ならピリピにある教会のように、彼らが主の中に留まっているからこそ、福音の働きの中にいるパウロのことを慕い、気にかけて、それで金銭の贈り物を自分の教会の指導者であるエパフロデトに託したのです。ですから、パウロはこうした彼らの姿に、キリストによって建て上げられている様子を見て、それで喜んでいました。

今ここで、「あなたがたは心にかけてはいたのですが、機会がなかったのです。」という言葉を使っ

ています。自分は主に捧げたいという思いをもちながらも、それをどこに表せばよいのか分からなかった。けれども、私が牢獄に入れられているということが良い機会となった、と言っている訳です。どういことに捧げていくとよいのか、そうした具体的な機会を見つけていくのは必要ですが、こうした機会があるのだよと示していくのは、責任は牧会者にもあるでしょう。ある友人の牧師さんは、「明石先生も、牧師給を受け取ったほうがいいですよ。」というアドバイスを受けました。私は今のところそのつもりはありませんが、けれども、彼の言わんとしていたことは理解できます。それは、自分自身のため以上に、聖徒が捧げ物を通して成長することのできる機会を与えることができるからです。

11 乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。
12 私は、貧しさの中にいる道も知っており、豊かさの中にある道も知っています。また、飽くことにも飢えることにも、富むことにも乏しいことにも、あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。

ここはとても大切なことです。お金のこと、捧げること、また教会の中にある責任関係は、どうしても横の関係になりがちです。贈り物を受け取って、それで嬉しがっているという誹りを、する人がいるかもしれません。いや、現に教会ではしばしば起こっています。けれども、教会では一貫して「主にあってどうなのか」が中心課題であり、これを横の関係だけで推し量ったら混乱します。例えば、教会の礼拝は怠りなく守りましょうといえ、**「そうやってなぜ信仰を強制するのですか？」**と反発する人がいます。いや、そういうことではなく、主の前に出る、しかも信者たちが集まって御前に出ることが、主の御心であり、また自分の益になるからこそ話している訳です。教会が人間的に、拘束したり、押し付けたりしたいからではありません。

パウロは金銭においても、その通りであることを話しています。必要はすべて主から来ます。そして、主が自分を満ち足らせてくださいます。金銭の多い少ないによって、その満ち足りが変わる訳ではありません。金銭で満ち足りようとする危険について、パウロはテモテ第一で語っています。「6:8-9 衣食があれば、それで満足すべきです。金持ちになりたがる人たちは、誘惑とわなと、また人を滅びと破滅に投げ入れる、愚かで、有害な多くの欲とに陥ります。」

しかし、かつて富が「マモン」という神として祭られていたように、金銭には力があります。私たちは貧しいか、富んでいるかによってその生活や心や思いが大きく変えられてしまう影響力があります。箴言には、自分の弱さをわきまえていたアグルという人が、次のような祈りを主に捧げています。「30:7-9 二つのことをあなたにお願いします。私が死なないうちに、それをかなえてください。不信実と偽りを私から遠ざけてください。貧しさも富も私に与えず、ただ、私に定められた分の食物で私を養ってください。私が食べ飽きて、あなたを否み、「主とはだれだ。」と言わないために。また、私が貧しくて、盗みをし、私の神の御名を汚すことのないために。」彼が願わなかったのは、不信実になること、偽りを持つことでした。貧しいのであれば盗みをしてしまう恐れがあります。そして、富んでいるならば主ではなく、その富に抛り頼み、主を忘れてしまうのではないかと恐れています。

ですから、貧しい時にどのように対処するか、富んでいる時にどのように対処するか、その秘訣を心得ていることが必要なのです。パウロは、ここで「あらゆる境遇に対処する秘訣を心得ています。」と言っていることはその通りです。貧しくなれば、それなりの生活を彼は送っていたことでしょう。そして富んでいても、それをいかに主の働きのために捧げていくか、知恵をもって管理したことでしょう。富があるなしによって自分が左右されるのではなく、自分が主にあつて富を支配するのです。

13 私は、私を強くくださる方によって、どんなことでもできるのです。

この箇所を、前後関係を見捨て、可能性思考のようにとらえる人たちがいます。主によって私は何でもできる、超人的な力を得て、どんなことにも対処できると受けとめるのです。それだと、映画の中に出てくる、スーパー・ヒーローのようになる約束になってしまいます。そうではありません、そうではなくあらゆる境遇の中に対処する力のことを、ここでは意味しています。むしろ、あらゆる境遇の中で、それでも主に命じられたことを行なう力のことを指しています。キリストはパウロに、「2コリント 12:9 わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われました。

パウロは、今、牢獄にいます。彼にできないことは、たくさんあります。しかし、どうでしょうか、彼は自由でした。「大胆に、少しも妨げられることなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。(使徒 28:31)」とあります。鎖につながれている人が、どうしてそのようなことが言えたのか？まず、ローマの看守に対して福音を伝えました。そして彼は物理的に外に出でいけませんが、主ご自身が人々を彼のところに連れてきてくださいます。パウロは、周りの環境によって自分が左右されることのないよう、主にあつて支配する心得がありました。それで主の命令を守ることに集中できたのです。

ある説教者がこんなことを書いていました。「ある若い伝道者が・・・、こう言いました。「わたしは開拓伝道をするのに、オルガンがないから困ります。説教台がないから困ります。だから開拓伝道はできません。」それを聞いた所の先輩たちは、もう苦笑しました。説教台がなければ、みかん箱でも、りんご箱でも、ひっくり返して、その上に白い布でも置いて説教すればいいし、オルガンがなければ手拍子があるじゃないか。すなわち、わたしたちは、あれがないから、これがないからできないと考える。一切が与えられていて、何でもすることができる状況であるのに、できない事ばかりを考えて、駄目だ、駄目だと言っているのです。しかしパウロは、できない環境の中で、できると発言する。」¹ 全くその通りです。

2B 困難の分け合い 14-16

14 それにしても、あなたがたは、よく私と困難を分け合ってくれました。

¹ <http://shalom.holy.jp/book/n-page/index12.html>

パウロはピリピの人たちのことを誇っています。福音宣教において、パウロは、特殊な環境の中に置かれていました。福音宣教において、彼はエルサレムで騒動の中に置かれて、それからよく分からない中でカイザリヤに抑留されて、それから囚人としてローマに護送されました。主のみことばのゆえに、彼が鎖につながれているという状況は、簡単には理解してもらえません。宣教の働きや何かの働きの現実として、その広報活動に長けている人のところには支援が集まりやすく、そうでない人のところは、支援金はあまり来ません。けれども前者よりも後者のほうが、実はもっと多くの働きをしていることが多いのです。福音宣教の最前線にいるからこそ、その働きが人目につかないからです。ですから、パウロはピリピの人たちが、そのような状況にいる彼のことを、よく分かってくれた、すばらしいとほめているのです。

15 ピリピの人たち。あなたがたも知っているとおりに、私が福音を宣べ伝え始めたころ、マケドニヤを離れて行ったときには、私の働きのために、物をやり取りしてくれた教会は、あなたがたのほかには一つもありませんでした。16 テサロニケにいたときさえ、あなたがたは一度ならず二度までも物を送って、私の乏しさを補ってくれました。

彼が福音を宣べ伝え始めた頃というのは、彼が小アジアから、主に呼ばれて、マケドニヤに足を踏み入れた時のことです。ルデヤという紫布の商人とその家族が主を信じ、バプテスマを受けました。それから占いの霊につかれていた女からその霊を追い出すと、その主人たちがパウロとシラスを引きずってきて、それで彼らは鞭打たれて、牢獄に入れられました。それから、地震が起こって獄舎が壊れて、看守が自害しようとしたところ、「主を信じなさい、そうすればあなたも、あなたの家族も救われる。」と言いました。その後でパウロは、ローマの長官たちに抗議をして、それから兄弟たちに出会ってから、ピリピを発ちました(以上、使徒 16 章)。これが福音を宣べ伝え始めた頃のことです。

その時に物のやり取りをしてくれたのは、ピリピにある教会のみでした。彼はテサロニケに行きましたが、テサロニケ人への手紙を読みますと、彼はその新しい信者に対して負担になることのないように、自分の手で働いていました(2テサロニケ 3:8)。けれども、その時にも彼らは二度までも物を送ってくれたということです。

3B 霊的果実 17-20

17 私は贈り物を求めているのではありません。私のほしいのは、あなたがたの収支を償わせて余りある霊的祝福なのです。

パウロが欲しいのは、贈り物そのものではなく、そうした贈り物の背後にある霊的な実です。ここの「霊的祝福」というのは、直訳は「果実」と訳されるものです。パウロはわきまえていました、こうした物質的なものは決して軽視していませんでした。愛の現れは、言葉や口先のものではなく、真実な行ないが伴ったものだからです。だから、物質的なもののやり取りは、霊的な実が結ばれていることの証拠でした。それと同時に、物が与えられればよい、という物質的なものの動きだけを見ていたら、そ

れは本質を見失っているし、彼自身が富に左右されていることになります。大事なものは霊的な実であり、その実は具体的な贈り物を通して現れているのです。

ここで、「あなたがたの収支を償わせて余りある」という表現が大事です。主が与えられるものは、豊かなものであり、そして余りあるものであるということです。この恵みの原則を知る必要があります。「惜しまずに死に渡された」という言葉が、父なる神が御子を与えられる時に使われました(ローマ 8:32)。主から出てくるもの、主の授けてくださるものは、私たちの収支に収まり切れない、有り余るものとなっています。この流れ出ていくような恵みがあって、それで主に捧げ物をします。ですからイエス様は、「受けるよりも与えるほうが幸いである。(使徒 20:35)」と言われました。

しばしば経済においても、「お金は使うものだ」という言葉があります。お金はたんずりにしまっておくものではなく、使って血流のように流さないと経済が動かないと言われます。これは真理だと思いますが、霊的にはなおさらのことそのとおりです。主からの恵みを流すことによって、なおのことその恵みに満ちます。自分の生活は乱されたくない、自分のペースでやっていくのだという姿勢では、その恵みがやってきません。自分ではなく、自分に与えられた主の導かれるペースで動きます。そこには、犠牲が伴うでしょう。困難が伴う時もあります。しかし、主が弟子たちと共におられたように、圧倒的にパンの数が少なかった時に、それを増やして、有り余るようにしてくださる原則があるのです。

18 私は、すべての物を受けて、満ちあふれています。エパフロデトからあなたがたの贈り物を受けたので、満ち足りています。それは香ばしいかおりであって、神が喜んで受けてくださる供え物です。

パウロは、その受け取ったものについて、「すべての物を受けて、満ちあふれています」と言いました。それは物理的な話をしているのではありません。その背後にある霊的実質のことを話しています。彼らの惜しみない捧げ物の背後には、すべての必要を満たすことのできる神ご自身がおられます。その恵みに満ちた神に触れたので、彼は「すべての物を受けた」と満ち足りているのです。ちょうどこれは、イエス様が貧しい寡の献金をご覧になった時と同じです。レプタ銅貨二枚を投げ入れられていることが、「どの人よりもたくさん投げ入れました。(ルカ 21:3)」と言わしめました。彼女が、生活費の全部を投げ入れたからだ、と言われます。犠牲を伴っているということです。

そして、それは「香ばしいかおりであって、神が喜んで受けてくださる供え物」ということです。これは、主がイスラエル人に命じられたいけにえのことを指しています。全焼のいけにえや、和解のいけにえがありましたが、その煙が主に対して受け入れられる香ばしいかおりなのです。新改訳では、「主へのなだめのかおり(レビ 1:9 等)」と訳されています。つまり、この捧げ物は純粋に、主に対して行なわれたもの、受け入れられたものということです。献金は、人に対してするものでもなく、教会に対してするものでもなく、あくまでも自分自身が主に対してするものです。そして主が喜んでおられます。

19 また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて

満たしていただきます。20 どうか、私たちの父なる神に御栄えがとこしえにありますように。アーメン。

先ほど話しましたように、ピリピの人たちは困難と貧しさの中から、惜しみなく捧げ物をしていました。ゆえに、その手元に残っているものはもはやないと考えられます。そこでパウロは、「私の神は、あなたがたのその必要をすべて満たしていただきます。」と言って、その不足を神が完全に満たしていただくことを伝えました。

主の働きによって、事欠くというようなことはありません。人間が惜しんで出さないことによって、その恵みが流れなくて事欠くことはあるでしょう。ネヘミヤ記には、イスラエルの人たちが什一の捧げ物を怠っていたので、レビ人たちが自分の町に戻って行ってしまったということが書かれています。このように人の窮屈な心によって事欠くことはあるでしょうが、主ご自身の働きをして、主が必要に事欠くようにされることはないということです。列王記第二 4 章にある、「空の器」の逸話が典型的です。預言者のともがらの妻が寡になりました。自分と二人の子どもが住んでいる家に、貸主がやって来て取り立てようとしています。そこで、エリシャは「器を片っ端から借りてきなさい。」と言いました。そして、油のつぼから、その空の器に油をつぎ、ありったけの器は油で満ちました。そしてエリシャは、「これ売って、負債を払いなさい。」と言いました(4:1-7)。主がすべての必要を満たしていただきます。

ところで、ここで大事なのは「必要をすべて」満たしてくださるということです。自分の欲するものを満たしてくださるのではなく、必要を満たすということであります。私たちの心の中で「これが必要だ」と思っているものと、神が知っておられる必要では、差があるかもしれません。しかし必要は満たしていただきます。

そして、その必要のすべてを満たすための基準があります。「キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富」です。エペソの教会に対しても、パウロは似たような発言をしました。「エペソ 3:16 どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしていただきますように。」神の栄光の豊かさ、キリストにある栄光です。この豊かさが内なる人を強め、またすべての必要を満たします。それで彼は頌栄をしています、「父なる神に御栄えがありますように」と言っています。主を礼拝し、主の栄光をほめたたえている中で、そうした礼拝生活の中で、必要が満たされるということです。献金というのが、いかに人に向けられたものではなく、神に向かった礼拝行為であるかが分かるでしょう。

2A 聖徒への挨拶 21-23

そして最後の挨拶です。

21 キリスト・イエスにある聖徒のひとりひとりに、よろしく伝えてください。私といっしょにいる兄弟たちが、あなたがたによろしくと言っています。22 聖徒たち全員が、そして特に、カイザルの家に属する人々が、よろしくと言っています。

パウロは挨拶を、「聖徒のひとりひとり」と言っていますね。特定の聖徒ではなく、全ての一人一人の聖徒です。教会というのは、一人として漏れることのない包容があります。そして挨拶をしている人々も、同じように「聖徒たち全員が」と言っています。挨拶も一人一人なのです。ですから、大事なことは「私は教会に来ている」というような、教会を他人事のように語ることはできないのだということです。「私はこの教会の一部だ」というのが正しいのです。ところで、ある人が日本国のことを言っていました。「『この国』と呼ぶ日本人がいるが、日本語にはきちんと、『我が国』という表現がある。」本当にその通りです、なぜそこまで自分の国を極端なまでに客観視するのでしょうか、そこには意地悪さえ含まれています。他の国では、例えば韓国では必ず「我々の国」と言います。自分がその一部なのです。霊的にはなおさらのこと、自分も教会であり、挨拶の中に自分が含まれているし、また挨拶するときも自分が含まれているのです。

そして、「聖徒」という呼び名も大事です。これは、「聖別された者」「聖め別たれた者」という意味で、この世から聖め別たれて神の所有の民となったということです。「信徒」という言葉が日本の教会では一般的ですが、実は聖書では「聖徒」の呼び名のほうを頻繁に使っており、もっと教会らしさを表しています。私たちは聖徒、聖め別たれた者たちです。

そしてパウロは周りにいる兄弟たちからの挨拶と、そして聖徒たち全員を挨拶をする者たちに加えてから、「特に、カイザルの家に属する人々」を加えています。これは驚きですね、私たちの教会へのあいさつで、「特に、皇族に属する人々が、よろしくと言っています。」という言葉があったらどうでしょうか？びっくりするでしょう。皇族では神道の祭事が中心に行なわれており、キリスト者として生きるのは非常に困難です。同じように、ローマの中で、カエザルに仕えながら主なるキリストに仕えることは、皇帝こそが神であり、救い主であると考えられていた中で至難の業です。しかし、その奇跡が起こっていました。彼らも同じ兄弟たちであり、私たちは一般庶民も政治の中心にいる人々も、神の国が広がっていく中において兄弟姉妹なのです。

23 どうか、主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。

手紙のしめくりが、「主イエス・キリストの恵み」というのはふさわしいです。すべては恵みから始まり、恵みで終わります。チャック・スミスは、「なぜ恵みがすべてを変えるのか。」という本を書きました。「恵み」という古めかしい言葉の中に、すべてを変える秘訣があることを話しています。主がキリストにあってすべて行なってくださった、自分が受けるに値しない神の好意を受けている、この好意があなたがたの霊と共にありますようにということです。私たちはこの愛の中に生きているでしょうか？絶えずここに戻り、この中に浸り、主にすべてを捧げていくべきですね。